

# T. S. Eliot の詩における‘私’について

山本直雄

## 序

文学作品を作られたものと見るならば、作品における‘私’なる人物も作られたものである。‘私’はあくまで‘私’に過ぎないのであって、彼が作者自身と同一であろうとなかろうと、あるいは作者自身の影をどれだけ落としていようと、構わないことだ。私がこれから論じようと思う T. S. エリオットの詩における‘私’についても、これは同様に当てはまる。しかしながら、十九世紀ロマン派の詩における‘私’とエリオットの詩における‘私’を比較してみたら、同じようにどうしても構わないと思いつて言うことはできない。それは、主として我々の受ける印象の問題なのであるが、前者の詩における‘私’がほとんど詩人自身ではないかと思われるのに対して、エリオットの詩における‘私’は詩人自身という印象を与えないばかりか、その存在意識さえも我々に要求しないからである。

私はこの小論でその原因を明らかにし、そして‘私’の有する、詩にはあまり見られない二重構造を考察し、その意味づけを試みてみたい。なお対象は彼の前期の詩である。<sup>(1)</sup>

## 1

実際エリオットの詩における‘私’は、詩人その人を意識させないように、ほとんどあらゆる点で工夫されていた。あるいは、詩及び‘私’にそのあらゆる条件が揃っていた。

### (1) 内容の否定性

エリオットの詩の内容は彼がしばしば用いる‘neither nor’に象徴される。彼の詩は‘人のいない通り’、‘気の抜けたビールの匂いが漂うスタンド’、‘ジュ

リエットの墓の雰囲気’，‘性病に煩うユダヤ人’，‘溜息を吐きながら通勤する男たち’などマイナスイメージで構成されている。仕立てられた主人公は，頭の最中に禿がありコーヒーのさじで人生を測って来た，自意識過剰気味の憶病者<sup>(2)</sup>とか，毎朝公園で新聞の三面記事やスポーツ欄を読み耽る，climaxには耐えられない男<sup>(3)</sup>とか，人生において激しい情熱を燃やしたことがなく，善も悪も行なったことのない，いわば Limbo に暮らす男<sup>(4)</sup>といったけちな人物ばかりである。このような人物の告白か観察の形式で展開される story（もしやそう呼べるものとして）は否定的色彩を帯び，詩の表現しようとする情緒も否定的になる。そして彼らは，自分の見た醜悪に対して何らかの治療法を示すことは絶対といって良いほど試みない。エリオットは，いわば現代人の否定的側面を主たる詩的題材として用いた。それは，イエーツに代表されるような物議<sup>(5)</sup>をかもし出したのであるが，エリオットの詩的信念からすれば，詩人は人生の美も醜も同じように題材として用いることができ，鉛の空も，澄んだ小鳥のさえずる空と同様に詩美を作り出せるのである。

主人公‘私’の縮小化は，読者から劣等感を取り除くと同時に‘私’を強く意識することを妨害し，否定的内容は，集合の原理の同じように限定性が小さいので，詩における‘私’を浮き立たせないのである。

## (2) Irony

否定的内容は irony を連れてくる。negative な内容はそれ自体が目的であろうとなかろうとその正常な状態あるいは positive な面を暗示する。‘I have measured out my life with coffee spoons.’や‘I was neither at the hot gates / Nor fought in the warm rain / Nor knee deep in the salt marsh, heaving a cutlass, / Bitten by flies, fought.’などはその典型であろう。

エリオットの詩は，このマイナス・プラス対照から生ずる単純な irony の他に様々のタイプの irony を発散させているが，便宜上ここでは Hugh Kenner が指摘した類のものだけ触れておく。彼は，The Love Song of J. Alfred Prufrock というタイトルについて，anti-climax 的漫画的効果があり，ここ

においてエリオットは主人公から離脱に成功した<sup>(6)</sup>と指摘した。彼の観察はいささかオーバーであるが、とにかく離脱効果のあることは認めざるを得ない。‘I have seen the eternal Footman hold my coat, and snicker,’ といった詩句も同様の効果を与える。

エリオットはこのような諧謔的 irony のタッチをラフォルクから引き出した<sup>(7)</sup>のであるが、irony は二段式表現方法である。それは直線的に情緒を表現しようとする芸術家には不向きな手法であって（もし行なおうとすれば愚痴になり易い）、一度それを素材として陳列してまず自己から突き離し、それから組み合わせ構成する芸術家には扱える手法である。irony は創作の際すでに超然とした態度を必要とするし、詩を現実の人生及び製作者自身から一步離す効果を持つのである。

### (3) 観察者としての‘私’

エリオットは ‘The Waste Land’ の Tiresias に関する注で

Tiresias, although a mere spectator and not indeed a ‘character’, is yet the most important personage in the poem, uniting all the rest. Just as the one-eyed merchant, seller of currants, melts into the Phoenician Sailor, and the latter is not wholly distinct from Ferdinand Prince of Naples, so all the women are one woman, and the two sexes meet in Tiresias. What Tiresias sees, in fact, is the substance of the poem...

と言っているが、これは ‘The Waste Land’ における ‘私’ の位置をある意味<sup>(8)</sup>ではよく示している。ティレシアスの見るところのものが詩の本体であるならば、彼を天才詩人と同一視してよかろう。そして詩人は、単なる傍観者となり、詩人ではなく、詩人の見るところのものが本体となる。実際エリオットの詩、少なくとも前期の詩では、詩という場を覗く眼鏡のような動きをする ‘私’ がしばしば観察される。たとえば ‘Mr. Apollinax’ においては、Mr. Apollinax と ‘私’ は同じ場面に居合わせているのだが、‘私’ は Mr. Apollinax

を精神的関係などまるでないかのように見る。‘私’は生物学者がサルを見つめるように、情緒科学的に Mr. Apollinax を観察している。動詞もすべて反応を示すばかりで、積極的行動を示すものは一つもない。

このような位置は、‘私’が場面から detach した印象を与える。そして前期の詩においては、場面の事物や人物から detach はしていても、それを上からではなく平行に観察している。つまり‘私’も場面、現実から切り取った一つの構図、と同一平面上にいるのだ。さらにエリオットは詩において表現すべきものは、内省とか哲学・宗教の meditation ではなく、presentation であると信じていたので、個人的な思想や倫理感覚を眼鏡につけて、結論や解決を試みるようなことは避けようと努力していた。

#### (4) Objective Correlative

エリオットが芸術の奴隷的模倣性を否定し芸術作品の唯一の表現方法と規定した objective correlative は、個人的情緒の変形・拡大の重要な手段であった。この手法は、元来別に個人的情緒を隠蔽する目的をもっていただけではないが、結果としてそのような方向に導いた。表現しようとする情緒を直接情緒的言語で表わさないで、外的世界の対象物 (object in the external world) すなわち情緒的等価物 (emotional equivalent) に託して表現するので、作られた詩句には実際の間接生活が漂わせている血の気や、人間臭さが失われて、乾いていわば純化され固定した、詩にのみ存在する特有の情緒のように印象づけられるのである、‘I have measured out my life with coffee spoons.’ や ‘My smile falls heavily among the bric-a-brac.’ などはその適例である。

構造的に見れば、エリオットの作品においては、いかなる詩句・出来事・人物・場面も表現すべき芸術的情緒のために詩的論理で、<sup>(9)</sup> objective correlative として構成されており、普通の意味での論理性は二次的なものであり、<sup>(10)</sup> 無視されることもある。‘Gerontion’ や ‘The Waste Land’ では特にこの傾向が強い。だがこの表面上の断片性あるいは非論理性は、読者を実人生から断ち切らせる。そしてその多面性は、誰か同一人物一人を意識することを妨害す

るのだ。

#### (5) Conceit

一見何の関係もなさそうに見える事物の思わざる結合は、タイプライターの音とスピノザが、精神において同一空間に収まっている場合起こり得るのだが、これは現代においては、最も困難で、強引な想像力を必要とする表現方法であった。エリオットは、Metaphysical Poets と呼ばれる一派に見られるこの手法を称賛し彼自身も実験を行なった。たとえば、‘When the evening is spread out against the sky like a patient etherised upon a table;’などがそうである。

こういった方法は、普通の人間の生活空間や思考範囲を混乱させ、超越してしまうので一種のショックを与え、そしてそこから生まれる情緒は実人生から切り離されたものとなる。

#### (6) 借用・言及の豊富

エリオットは、‘Tradition and the Individual Talent’の中で、詩人は歴史的感覚 (historical sense) を所有していなければならないと主張したが、その詩での具体的な形は、主として借用・言及であった。借用・言及の果たしている役割は、過去の栄光と現代の没落との対比から生ずる irony と、時間感覚を破壊し、現代を全時代といった無時間的伝統に投げ込み、そこで意義づけるといふ二つが主である。だが、これもまた詩人自身の姿を見えなくさせるのに役立った。実際、‘The Waste Land’のように様々の時代の様々の言語の芸術作品や人物を登場させ、更に神話の枠組を用いるといった手の込んだ詩はそのことだけでも詩に莫大な多様性をもたらしている。<sup>(11)</sup>

前期の詩における‘私’が詩人自身という印象を与えない主な原因は大体以上の如きである。ただ断わっておかなければならないのは、上述の六つの要素はバラバラなのでなく、密接に関連しているということである。たとえば、irony は超然とした態度を必要とすることから、観察者としての、私’と関連があり、断片的傾向を形成しているのは、エリオットの詩では主として借用・言及の豊

富なためでありその傾向はまた、ショックを与える点では、conceit のより大きな単位とも考えられる。

後期の詩における‘私’が詩人自身ではないかという印象を与えるのは、前期の詩では negative な方法で表現されていた宗教的情緒が後期では、positive な表現となったことと、<sup>(12)</sup> 後期の詩における‘私’は現実を平行にでなく、上から見下ろしているからである。

ところで、‘私’は一体何であろう。初めに言ったように、第一次的な意味では、‘私’は‘私’であってこれ以上言及することは何もないのである。しかしながら、詩的創作の際におけるエリオットの‘私’すなわち自分自身についての考え方を考察することは、ロマン派のそれと比較する際、意義のあることであろう。

## 2

エリオットの詩における‘私’には二種類の二重性がある。一つは、George Williamson が指摘したものだが、<sup>(13)</sup> たとえば‘The Love Song of J. Alfred Prufrock’においては、一方では多くの若者が夢みる恋愛（精神的であると同時にそれ以上にエロチックなもの）に対する憧れを抱いているが、また一方では、憶病から生ずる、そんな恋愛なんて底の底まで知り抜いており大して価値などないんだという居直った心情を持つというような、人格の二重性である。もう一つは、二重人格を持った‘私’が登場人物として現われる場面から生ずる状況を、より一般的な見地から眺め、演出したりコメントしたりするもう一人の‘私’がいるという二重性である。私これから抜おうと思うのは後者である。

登場人物と観察者の二役を持つ‘私’の構造はエリオットの詩に見られる一種の二次元的構成から生じている。‘Gerontion’の中に‘I have not made this show purposelessly’という句があるが、これはエリオットの詩の構造の示唆に富む。場面の中で何らかの役を受け持つ‘私’が一方におり彼を意識的に操作し、主として読者に向けて語る‘私’がまた一方に居るのだ。‘Mr. Apollinax’では場面の中で役を受け持つのは、Mr. Apollinax, Mrs. Phlaccus および

Mr. and Mrs. Cheetah で、‘私’が観察者であるとすれば、‘The Love Song of J. Alfred Prufrock’ ‘Portrait of a Lady’ ‘Gerontion’ ‘The Waste Land’などは‘私’が役を受けもちかつ観察し演出していると言えるだろう。これら二人の‘私’が比較的はっきり分離していると思われる‘Portrait’、および‘The Waste Land’の第一部のいくつかの節を分析して見よう。

‘Portrait’第一部は、始めから第一節の終わりまで、ジュリエットの墓の雰囲気の中で、音楽を聞きながら、連れと一緒に婦人のショパン及び友情についての談話を聞いているが‘私’がいる。第二節に入ると、‘私’はそういった話にうんざりし始め、やがて8行目から突然調子が変わる。

—Let us take the air, in a tobacco trance,  
Admire the monuments,  
Discuss the late events,  
Correct our watches by the public clocks.  
Then sit for half an hour and drink our bocks.

これら5行は、話題から逃げ出したい気持ちをを表わす点では、情況の連続であるが、しかし一方その tone は情況の外、すなわち読者に向かう響きもある。第二部は、ほとんど登場人物として婦人と顔をつき合わせ、彼女の話に反応する‘私’がいるだけであるが、最終行‘Are these ideas right or wrong?’は自問すると同時に読者にも問いかける観察者の‘私’が顔を出している。第三部では、第四節まで登場人物としての‘I’がいる。第五節に入ると第一部第二部と同じような向きに、そしてもっと強い変調が始まる。

And I must borrow every chaging shape  
To find expression... dance, dance  
Like a dancing bear,  
Cry like a parrot, chatter like an ape.  
Let us take the air, in a tobacco trance—

これは、女の言い寄りに対して、結着をつける責任感を回避したい気持ちを表現するとともに言葉の流れは情況の外に出ようとしている。そして最終節

Well! and what if she should die some afternoon,  
 Afternoon grey and smoky, evening yellow and rose;  
 Should die and leave me sitting pen in hand  
 With the smoke coming down above the housetops:  
 Doubtful, for a while  
 Not knowing what to feel or if I understand  
 Or whether wise or foolish, tardy or too soon...  
 Would she not have the advantage, after all?  
 This music is successful with a 'dying fall'  
 Now that we talk of dying—  
 And should I have the right to smile?

では、もはや‘私’は情況の外に出て、情況を眺め総括し、その意味を模索しようとしている。

‘The Waste Land’の第一部‘The Burial of the Dead’は、やや演劇的と思われる方法で詩の情況、登場人物紹介の役割をもっている。そして二人の‘私’の分離がもっとはっきりしている。

April is the cruellest month, breeding  
 Lilacs out of the dead land, mixing  
 Memory and desire, stirring  
 Dull roos with spring rain.  
 Winter kept us warm, covering  
 Earth in forgetful snow, feeding  
 A little life with dried tubers.

この第一節冒頭の7行は、時から見た‘荒地’の姿である。そしてこれらは何ら



の具体的場面からの声でなく、総括的で広く読者に向けて語る言葉である。しかし同節の後半

Summer surprised us, coming over the Starnbergersee  
 With a shower of rain; we stopped in the colonnade,  
 And went on in sunlight, into the Hofgarten,  
 And drank coffee, and talked for an hour.  
 Bin gar keine Russin, stamm' aus Litauen, echt deutsch.  
 And when we were children, at the arch-duke's,  
 My cousin's, he took me out on a sled,  
 And I was frightened. He said, Marie,  
 Marie, hold on tight. And down we went.  
 In the mountains, there you feel free.  
 I read, much of the night, and go south in the winter.

にはいると突如リトアニア出のドイツ人だと主張する女の話を聞いている‘場面の中での主人公らしい聞き手’が登場する。そしてこの11行は時から見た‘荒地’の一つの具象である。

第二節にはいると

What are the roots that clutch, what branches grow  
 Out of this stony rubbish? Son of man,  
 You cannot say, or guess, for you know only  
 A heap of broken images, where the sun beats,  
 And the dead tree gives no shelter, the cricket no relief,  
 And the dry stone no sound of water. Only  
 There is shadow under this red rock,  
 (Come in under the shadow of this red rock),  
 And I will show you something different from either

Your shadow at morning striding behind you  
 Or your shadow at evening rising to meet you;  
 I will show you fear in a handful of dust.

は、前の種話とは全然関係なく、こんどは、場から見た乾涸びて石と岩になった不毛の‘荒地’の総括的提示を行う general observer としての‘私’が登場する。終わりの4行の声の主である‘私’は、演出家が舞台奥から出て来て観客に呼びかけるように、‘you’我々読者に呼びかける。そして前奏曲が終わると、

‘You gave me hyacinths first a year ago;  
 ‘They called me the hyacinth girl.’  
 —Yet when we came back, late, from the hyacinth garden,  
 Your arms full, and your hair wet, I could not  
 Speak, and my eyes failed, I was neither  
 Living nor dead, and I knew nothing,  
 Looking into the heart of light, the silence.  
*Oed’ und leer das Meer.*

‘hyacinth girl’ とやや象徴的（表面的な意味で）な名称ではあるが、呼ばれる女と恋愛し挫折した、Prufrock と Gerontion をミックスした人物のような‘私’なる登場人物が現われる。そしてこれは、恋愛不能を通じて捉えられた場から見た‘荒地’の具象であるそれほど具体的な場面ではないが、読者に向けての声でないことは確かである。

次の節は、登場人物紹介の場面で、‘私’なる主人公が占師のソストリス夫人の所で占いをしてもらっている限りでは、‘私’は situation に含まれているので登場人物といえるが、しかし一方このソストリス夫人の占いに出て来る言葉は、範囲の広いもので、‘私’なる人物 (you) に向けてというようり読者に向けての言著である。従ってこの‘私’ (you) は二重の役割を持つている。エリオットの詩における‘私’は、時にはここ及び ‘Portrait’ 第一部第二節の

ように両者の比重の差を有しながら、二重の役割を帯びたり、時には前節及び前々節のように比較的明瞭に分離してくるのである。

さて、この ‘And indeed there will be time’ とか ‘This is I had reckoned.’ という台詞もしくは内心の声を吐いて演技する役をもつ ‘私’ と ‘Are these ideas right or wrong?’ とか ‘What are roots that clutch, what branches grow / Out of this stony rubbish?’ ‘I will show you fear in a handful of dust;’ と situation の外に出て、より広い見地から、general observation を行い主として読者に語りかける ‘私’ の二重構造は何を示しているのか。なぜこのように作られているのだろうか。

### 3

結論を先に言ってしまうと、私は詩人としてのエリオットが人間としての主に過ぎし日の自分自身をあくまで単に詩的情緒のための素材として、外界の事物同様に一步超然と観察した結果生じた構造ではないかと思う。

このようなプロセスを暗示していると思われる初期の love song<sup>(14)</sup> を検討してみる。

So I would had him leave,  
 So I would have had her stand and grieve,  
 So he would have left  
 As the soul leaves the body torn and bruised,  
 As the mind deserts the body it has used,  
 I should find  
 Some way incomparably light and deft,  
 Some way we both should understand,  
 Simple and faithless as a smile and shake of the hand.

この詩の ‘he’ を観察すると、一見 ‘私’ の恋していた ‘she’ なる女の恋人の

ようであるのだが、私は 'he' が実は少女と心情的接触のあった頃の過去の '私' ではないかと考える。'he' なる男の性格や言動を直接表わしているものは一つもない。全くの第三者であれば何らかの独自の表現があるはずである。'he' なる男の当時の言動は '私' の吐く言葉の中に反映されかつ内包されていると言ってよい。心理的に考察しても、男は恋敵に自分の恋人のもとから去らせて、恋人を悲しませたいとは思わない。自分を恋人のもとから去らせて、女を悲しませたいと思うのが普通である。これは自意識の強い現代人の男（あるいはあらゆる時代の男）の偽らざる誠実なフレデリック・モロー風の恋愛心理表現であって、'Portrait of a Lady' における 'My self-possession flares up for a second; / This is as I had reckoned.' と同質のものである。エリオットの表現が時として異様な印象を与えるのは、奇想などを手段として特定の情緒を奇型化したりあるいは飛躍的に拡大しているか、あまりに誠実な時かどちらかである。

ここでは、過去の自分を悔恨しながらしかし一方では 'he' などと呼ぶ程に観察する '私' が見出される。そしてこの構造はエリオットの詩における '私' の二つの構造を暗示してはいないだろうか。

次にエリオットの個人的情緒・経験についての芸術的見解を後のエッセイを通じて迎って見る。

'Tradition and the Individual Talent' の 'What happens is a continual surrender of himself as he is at the moment to something which is more valuable. The progress of an artist is a continual self-sacrifice, a continual extinction of personality.'<sup>(15)</sup> や 'Poetry is not a turning loose of emotion, but an escape from emotion; it is not the expression of personality, but an escape from personality. But, of course, only those who have personality and emotions know what it means to want to escape from these things.'<sup>(16)</sup> single quotationmark の二つの statement はあまりにも有名であるがまた誤解を受け易いほど徹底していた。エリオットは、これらによって芸術において表現

されるべきものは、個人的情緒なのでなく、芸術的情緒なのであるから、詩人も個人的情緒を消化してしまうよう努力しなければならないと言いたかったのである。だがこのエッセイは個人的情緒を軽視し過ぎている傾向があるために、いかなる個人的情緒も表現されるべきでないという印象を与えた。そして彼の *Prufrock and Other Observations* や *Poems* における詩は、この印象を強化するのに役立った。事実これらの詩集の詩における‘私’が人としてのエリオットを意識させないことは前に述べた通りである。

ところで、エリオットの真意は、個人的情緒をそれほど軽視していたわけではないことが次にあげるような statement によって観察される。

It is essential that a work of art should be self-consistent, that an artist should consciously or unconsciously draw a circle which he does not trespass; on the one hand actual life is always the material and on the other hand an abstraction from actual life is a necessary condition to the creation of work of art. <sup>(17)</sup>

One is prepared for art when one has ceased to be interested in one's own emotions and experiences except as material; and when one has reached this point of indifference one will pick and choose according to very different principles from the principles of those people who are still excited by their own feelings and passionately enthusiastic over their own passions. <sup>(18)</sup>

Like all of Valéry's poetry, it is impersonal in the sense that personal emotion, personal experience, is extended and completed in something impersonal—not in the sense of divorced from personal experience and passion. No good poetry is the latter...

(10)

エリオットは個人的情緒や経験は、詩作の際用いて差し控えないどころか、む

しろ当然用いるべきだが、肝要なのはそれを芸術的詩的情緒を表現するための素材として、詩作の際にはそこから一たん離脱し自由に選び出せるようにしておくべきだと主張しているのだ。材料として選び吟味するためには自分自身を客観的に観察しなければならない。エリオットは、芸術と伝統を意識することによって自分をも他人やまわりの社会と同様に冷徹な詩眼で観察することを可能とした。

伝記的に見ても、登場人物としての要素が圧倒的である自意識过剩気味で憶病な 'Prufrock' における '私' Prufrock はエリオット自身にかなり近い性格を持った男と思われる。<sup>(20)</sup> また 'Portrait' における '私' に話しかける Lady は実在の人物をモデルとしているし、<sup>(21)</sup> '私' の事情はエリオットの経歴に照応できる。さきほど分析を試みた 'The Waste Land' の第一部における '私' がリトアニア出身のドイツ人の女の話を書く場面は、エリオットがドイツへ行ったとき経験し妙に脳裡にこびりついたことである。<sup>(22)</sup> 全ての登場人物としての '私' をこのように解明することは不可能であるが、ただこれら登場人物としての '私' の現われる場面や吐く台詞は制限された特殊性を持っており、具象性が強い。具体的な事物・人物・場面は、必ず個人的実生活の背景を基盤としているものである。

エリオットの詩における '私' が二つの役割を持っているのは、彼が詩人として、人生経験を担った人間としてエリオットを一步離れて観察した結果の構造ではないだろうか。

... the more perfect the artist, the more completely separate in him will be the man who suffers and the mind which creates. <sup>(23)</sup>

#### 注

- (1) 'The Waste Land' までを指す。
- (2) 'The Love Song of J. Alfred Prufrock'
- (3) 'Portrait of a Lady'
- (4) 'Gerontion'
- (5) Unger, Leonard, ed., *A Selected Critique*. New York, Russel & Russell, 1966. p. 287.

- (6) *The Invisible Poet: T. S. Eliot*. London, Methuen, 1966. p. 4.
- (7) *A Selected Critique*. 'Edmund Wilson', p. 172.
- (8) すなわち、いかなる場面においても積極的行動に出ない点で。
- (9) 深瀬基寛, 「エリオット」, 東京, 筑摩, 1968. p. 106.
- (10) たとえば, 'Prufrock' の全体として表現している情緒を, 仮に憶病から生ずる不行動の願望とすると, 'When the evening is spread out against the sky / Like a patient etherised upon a table;' に始まり 'And indeed there will be time / To wonder, 'Do I dare?' and, 'Do I dare?'/ Time to turn back and descend the stair, / With a bald spot in the middle of my hair— や 'I should have been a pair of ragged claws / Scuttling across the floors of silent seas.' や 'Would it have been worth while / If one, settling a pillow or throwing off a shawl, / And turning toward the window, should say;' / single 'That is not it at all, / That is not what I meant, at all.' を通って, We have lingered in the chambers of the sea / By-sea-girls wreathed with seaweed red and brown / Till human voices wake us, and we drown.' に至るまであらゆる詩句は論理的というより詩的情緒の論理で連結されて, '不行動の願望' の情緒に列を成して集まっていることがわかる。
- (11) Wright, George T., *The Poet in the Poem*. Berkeley and Los Angeles, University of California Press, 1962. p. 65.
- (12) 安田章一郎, 「T. S. エリオット研究」, 東京 南雲堂, 1966. p. 99.
- (13) *A Reader's Guide to T. S. Eliot*. New York, Noonday Press, 1967. p. 55.
- (14) 'La Figlia Che Piange'
- (15) *The Sacred Wood*. London, Methuen & Co. Ltd, 1967. p. 52.
- (16) *ibid.* p. 58.
- (17) *Selected Essays*. London, Faber & Faber, 1966. p. 111.
- (18) *Le Serpent*. London, The Criterion press, 1924. p. 12.
- (19) *ibid.* p. 14.
- (20) Sencourt, Robert, *T. S. Eliot: A Memoir*. New York, Dell Publishing Co Inc., 1971. p. 26.
- (21) *The Invisible Poet*. p. 22.
- (22) *T. S. Eliot: A Memoir*. p. 39.
- (23) *The Sacred Wood*. p. 54.